

令和5年度 障がい者総合サポートセンター取組状況

1 大田区精神障がいピアサポート講座の開催について

● 目的

- 精神障がいのある方だけでなく、支援者・家族等様々な属性の方がともに「ピアサポート」について学ぶことにより、理解啓発を図る。
- 参加者が、普段の役割を自然におり「対等な立場」で受講することで、その場を体感し自身のリカバリーやストレングスに気づき、可能性や希望を獲得してもらう。

日時	令和5年11月1日(水)、8日(水)、15日(水) 13:00~17:00
場所	大田区立障がい者総合サポートセンター5F 多目的室
参加者	延べ70名
周知先	庁内各課、大田区報、X(旧Twitter)、地域活動支援センター、就労継続支援B型事業所、地域包括支援センター、区内精神科のある病院、クリニック等
講師 ファシリテーター	聖学院大学 心理福祉学部 心理福祉学科 教授 相川章子氏 理～さん、愛さん
内容	<ul style="list-style-type: none"> ● サブテーマ「生きづらさと共にこの街で生きるために」 ● ピアサポートの核となる「経験の語り(リカバリーストーリー)」を、中心として全体共有し、リカバリーとピアサポートについて学ぶ。 ● 安心して講座に参加いただくために <ol style="list-style-type: none"> ① 安心・安全・居心地のいい場、② 「ここで、今」・味わい尽くす ③ 多様な人々の参加、④ 日頃の役割や立場は脇に置く ⑤ 感謝の気持ちを存分に伝える、以上5点を大切にす。 ● 居心地のいい場づくりのためのルールとして、最低限のルールをみんなでも出し合い決めて進めた。 <ul style="list-style-type: none"> ● 1日目：リカバリーストーリーを聴き、共有する。ピアサポートの前提となる「リカバリー」やリカバリーとピアサポートの関係について学んだ。 ● 2日目：コミュニケーション技法やバウンダリーとセルフケアを学び、後半、リカバリーの体験談を「語り手・聴き手・観察者」に分かれ演習した。 ● 3日目：ピアサポートを支える理論の1つである「ストレングス」について学び、全員で円になって座り「ピアサポート体験談」をリレートーク形式で共有した。これまでを踏まえ、「私にもできる！身近なピアサポート」と題して、グループワークを行い、あるといいこと、今できることを話し合った。 ● 今年度は、昨年度の講座参加者の中から、企画・準備を一緒に行っていただけの方を募り、講師・ファシリテーター・事務局と一緒に講座を作り上げた。

アンケートより	<ul style="list-style-type: none"> • ピアサポートの理解が深まった。 • 講座を年2回程度の頻度で実施してほしい。 • 利用者を、他の方や環境につなぐことができて良かった。 • とても居心地がよかったので、もっと勉強したいと思いました。 • ピアの場を作ってみたい。 • 本当に充実した3日間でした。1日目に来た時と、今日帰る時の気分が違いすぎて、私自身とても嬉しい気持ちです。 • ピアサポートの輪を大田区に広げたいと思います。 • 1回だけでなく、定期的に関わる機会があると安心だと感じました。 • 気軽に立ち寄れるカフェが実現できたらいいなと思いました。 • 生きづらさのある方との語り合う会を実際に地域でやってみたいと思います。
今後に向けて	<ul style="list-style-type: none"> ● 今年度の講座参加者を対象にフォローアップ講座を開催する。 ● ピアサポートの普及・理解啓発のため引き続き講座を実施する。 ● 来年度も、講座参加者を中心に、ピアサポート講座実行委員会を立上げ、協働して講座を実施する。

2 各所情報収集・連携について

東京都地域移行コーディネーター、中部総合精神保健福祉センターと連携し、地域移行の促進また地域づくりのため情報収集・検討を行った。

(1) 相談支援事業所連絡会おおた

テーマ「地域移行支援について」

毎月1回、大田区内では相談支援専門員が集まり連絡会を開いている。

今回は、区内支援者より地域移行支援の事例

1) 精神障がいのある方の病院から地域へ移行支援事例

2) 社会資源について（事例を通して）

を発表いただき、地域移行支援について検討するグループワークを行った。

(2) 医療法人社団 鶯の木会 南晴病院訪問

ご入院されている方の地域移行（退院促進）に向け、定期的に情報交換を行った。

5月25日に南晴病院にて、さぽーとぴあの事業説明会を実施。また、6月19日には、入院患者の見学会を実施した。

3 地域移行・地域定着研修について

講師：未定

時期：2～3月頃開催予定。

テーマ：未定

長期入院患者の現状を知り、地域で暮らすことをベースに受講生が主体的かつ具体的に考えられる研修を企画する予定。